

続 琵琶法師に関する二、三の問題

A Few Questions about Biwa-hoshi (2)

砂川 博

1 「哀傷の所は、盲目法師がかたる平家の物語にてぞありける」

松尾葦江氏は、『軍記物語論究』一八〇頁―一八一頁（若草書房、一九九六年六月）の中で、『歌苑連署事書』（佐佐木信綱編『日本歌学大系』第四卷、風間書房、一九五六年一月。以下「事書」と称す）中の表題の一節を含む文章を引いた後、

従来、平曲が鎌倉時代から哀調を帯びたものであったとの証に引用されて来た文章であるが、「哀傷の所」とは、勅撰集の部立の一つである哀傷歌を集めた巻を指す。『歌苑連署事書』は『玉葉和歌集』批判として書かれ、右の文章は部立の無秩序なことを罵倒する箇所であって、「すべてめづらかにおもしろし」とは皮肉の言である。『玉葉和歌集』雑歌四（巻一七）は哀傷歌を集めているが、その詞書や歌の内容には平家物語の内容と重なるものが多く、平行盛・全貞・忠快・建礼門院右京大夫の詠などを見出すことができる。つまり『歌苑連署事書』は

由緒正しかるべき勅撰集が、あたかも「物語」と同様であること、殊に「盲目法師がかたる平家の物語」などと同じ様であることに、痛烈な非難を浴びせているのであると断じた。

要するに松尾氏は、この記事の存在から、当時の琵琶法師の語り（平家語り）が、「哀傷」に満ちたものであるとする解釈を導き出すのは「誤解」だと言うのである。言われて見れば如何にもその通りで、そこに言う「哀傷の所」とは、外ならぬ『玉葉和歌集』巻第十七雑歌四中の『平家物語』に登場する人々にちなむ歌群を指すのであり、それらを非難・論難するために「盲目法師がかたる平家の物語」を引き合いに出したに過ぎないかのようだ。しかし「哀傷の所は、盲目法師がかたる平家の物語にてぞある」という文言から、当代の「平家語り」の曲節に「哀傷」の色を看取した「通説」はまるっきりの「誤解」であると断じ得るものであろうか。そこに再検討の余地はないのか。

改めて『日本歌学大系』第四卷所収の『事書』の該当の箇所を掲げてみよう。

一、句事

部だてよりはじめて思ふ様ならず。四季の運転景物の次第よろずみな前後錯乱せり。所謂きりのうたつきよりにみにおけるたぐひなり。旅には別の部まじへたり。後撰のやうならば題目にわかれたびとたゞみてかゝるべし。これもいとどけなくぞ。恋の四巻には四季のやうに次第をたて、歌をかゝれたり。いとめづらかなり。恋の四より後、殊によろしからず見え侍り。恋にあらざる歌も同じ。雑部はたゞ物がたりにてこそ待るめれ。哀傷の所は、盲目法師がかたる平家の物語にてぞある。雑三に折句の歌一首ふと見ゆるは何事ぞや。雑体の歌は、みな題目にあらはして部類あるべし。述懐の所には哀傷、哀傷の中には懐旧、むさくしく覚ゆ。釈教は聖教をひらき神祇は託宣の文にむかへらむがごとし。すべてめづらかにおもしろし。

いま改めて「句事」全体の文脈の中において傍線部を解釈するなら、なるほどそれが『玉葉和歌集』「雑部」の

「哀傷」歌に対する批判、論難の言であることはまちがいない。ただ敢えて言うなら、

哀傷の所は、盲目法師がかたる平家の物語にてぞある。

とあるのは、実は、

哀傷の所は、盲目法師がかたる平家の（哀傷の）物語にてぞある。

という具合に、そこに「哀傷の」を補うことができるのであり、言うところは、

雑部の哀傷歌は、まさに盲目法師のかたる平家の、哀傷の物語そのままだ。

ということになるのではないか。

『事書』は文字通り、ためにする目的でわざわざ「盲目法師がかたる平家の物語」を引き合いに出したのだが、そこには当然、そうすることが『玉葉和歌集』編者京極為兼に対する有効な非難や罵倒になるという理解があったはずである。相手をへこますために「盲目の法師がかたる平家の物語」を使ったわけだ。ことほどさように、「平家語り」が隆盛を極めていたのである。その意味で言うなら、正和四年（一一三五）成立の『事書』は、平家物語、平曲享受史上、貴重な史料の一つということになろう。

それはともかく、これ程までに非難、罵倒された『玉葉和歌集』「雑部」の哀傷歌であるが、巻十七雑歌四に収められた和歌の総数は一四二首。このうち「盲目の法師がかたる平家の物語」そのままと論難された、すなわち「平家の物語」に登場する人物の死を悲嘆・慨嘆、或いは追慕・追悼して詠まれた和歌は意外に少なく（以下、括弧内の人物が、その対象である）、三條入道左大臣・土御門内大臣（高倉院）、全性法師・平行盛（経正・忠度）、法印忠快・平行盛（通盛・業盛）、前右近中将資盛（維盛）、建礼門院右京大夫（資盛。ただし二首）、参河内侍（二条院）、中納言（建春門院）、前左兵衛督惟方・二条院中納言典侍（二条院）、前権少僧都全真（建礼門院）、建礼門院右京大夫（資盛）の都合一五首に過ぎない。雑歌四の一四二首のうち、僅か一割に止まっている。残りの九割方は、「盲目の法師がか

たる平家の物語」とは無関係の人々の死を悲嘆・慨嘆、或いは追懐・追悼する和歌ばかりである。

しかし少ないとは言え、『事書』の作者はこれらの一五首を対象として「哀傷の所は、盲目法師がかたる平家の物語にてぞありける」と一刀兩断したのだから、それはそれとして、詞書共々、それらの和歌が如何なる体のものであるのか、念のため確認しておくことも大切であろう。以下、次田香澄校訂『玉葉和歌集』岩波文庫、一九八九年三月から引く。

① 高倉院かくれさせ給ひにける春、権中納言実守のもとに梅を折りて遣はし侍るとて

三條入道左大臣

いかでかくうき世をしらで梅の花ことしも同じ色に咲くらん

② おなじ頃花の散るを見てよみ侍りける

土御門内大臣

散り残る花だにあるを君がなど此の春ばかりとまらざりけん

③ 元暦元年世の中騒がしく侍りける頃、平行盛備前の道を固むとて壇の浦と申す所に

侍りけるに、八月十五夜月くまなきに、過ぎにし年は経正・忠度朝臣など諸共に侍

りけるを、いかばかり衰れなるらんと思ひやられて、そのよし申し遣はずとて

全性法師

ひとりのみ波間にやどる月をみてむかしの友や面影に立つ

④ 返し

平行盛

もろともにみし世の人は波のうへに面影うかぶ月ぞ悲しき

⑤ 兄弟に一度に後れて歎き侍りけるを、平行盛遅くとぶらひ侍りければ、申し遣はしける

法印忠快

憂き身をば言問はずともかかる世の悲しき事は知るやしらずや

⑥ 返し

平行盛

悲しさをよその歎きと思はねば人をとふべき心地だにせず

⑦都を住みうかれて後物申しける女のもとより、前右近中将維盛はかなくなりける事聞き伝へて、哀れもいとど色そふさまに言ひおこせて侍りける返事にある程かあるにもあらぬうちに猶かく憂きことを見るぞ悲しき

前右近中将資盛

⑧前右近中将資盛身まかりて後、忌日に忍びて仏事など営みても、我がなからん世に誰かはこれ程もとぶらはんなど、悲しく思ひ続けてよみ侍りける
いかにせん我が後の世はさても猶むかしの今日をとふ人もがな

建礼門院右京大夫

⑨おなじ頃何となき物語を人のしけるに、思ひ出でらるる事ありて涙の止めがたくこぼれければ

憂き事のいつもそふ身は何としも思ひ敢へても涙落ちけり

⑩二条院かくれさせ給ひてまたの年の夏郭公を聞きて

参河内侍

寢覚して思ひぞ出づるほととぎす雲居に聞きし小夜の一こゑ

⑪建春門院かくれさせ給ひにける秋、植ゑ置かせ給ひける御前の前栽の盛りなる中に、女郎花の咲きこぼれたるを見て

中納言

露きゆるうき世に秋のをみなへし今年も知らぬ色ぞ悲しき

⑫二条院かくれさせ給ひて、彼の院に中納言典侍御はてまでとて一人候ひけるに、言ひ遣はしける

前兵衛督惟方

かくれにし雲居の月を思ひ出でて誰とむかしの秋を恋ふらむ

⑬返し

二条院中納言典侍

かきくらす涙ばかりを友として隠れし月を恋ひぬ夜ぞなき

⑭世の中に事ありて筑紫の方に流されて侍りけるが、後に召還され侍りて、建礼門院大原におはしましけるに参りて物申しけるにつけても、さまざま思ひ出づる事多くて、いみじう悲しく覚え侍りければ

前権少僧都全真

今日かくてめぐり逢ふにも悲しきは此の世へだてし別れなりけり

⑮前右近中将資盛みまかりて後志賀の浦を過ぎ侍りけるに、風吹き荒れて波の立つを

見るにも、かかるわたりにもあらましかばなど思ひ出でられて、よみ侍りける

建礼門院右京太夫

恋ひ忍ぶ人にあふみの海ならば荒き波にもたちまじらまし

以上の①から⑮の詠草を、たとえば現行の覚一本平家物語の章段に突き合わせるならば、高倉院の崩御を悼む①②は卷六 新院崩御、経正と忠度の戦死を悼む③④は卷九 忠度最期と知章最期、同じく通盛と業盛の戦死を悼む⑤⑥は卷九 落足、維盛の入水を悼む⑦は卷十 維盛入水、資盛の戦死を悼む⑧⑨⑩は卷十一 能登殿最期、二条院崩御を悼む⑪⑫⑬は卷一 額打論、建春門院の崩御を悼む⑭は卷一 東宮立、建礼門院訪問の際の感慨を詠んだ⑮は灌頂巻ということになる。いずれの和歌も、かけがえのない人を失った「哀傷」の思いを率直に詠んだものであり、それに照応する覚一本の章段もまた、それぞれに「哀傷」の氣に色濃く包まれているのであった。

このことを踏まえ、再度、

哀傷の所は、盲目法師がかたる平家の物語にてぞある。

に目を凝らすなら、次のようなことが言えるのではないか。

『事書』作者は、一方で如上の「哀傷」歌群を睨み、他方で「盲目法師がかたる平家の物語」を睨んだ上で両者を等価のもと判定した。その場合、当然引き合ひに出した「平家の物語」は「平家の哀傷の物語」の謂であつたことにならざるを得ない。もとよりそのことは、当代の「平家の物語」が全面的に「哀傷」の氣配に覆われていることを意

味するものではない。個々の章段によって「哀傷」にも濃淡があり、さほどに「哀傷」の気配の感じられないものもある。その意味で言うなら、『事書』の作者は、「平家の物語」をそれなりに分別して理解していたことになろう。

それはともかく、『事書』の作者が『玉葉和歌集』巻第十七雑歌四の「哀傷」歌群が「盲目法師がかたる平家の物語」そのままと論難したとき、彼の念頭にあったのは、その全てではないにしてもまぎれもなく「平家の哀傷の物語」群であったと見て大過はあるまい。問題は、それが「平家語り」の曲調までも視野に入れた、すなわち「平家語り」のもつ「哀傷」にまで言い及んだ発言と判定することができるかどうかである。松尾葦江氏は、それは「誤解」だと一蹴するが、果たしてそう断じ得るものなのかどうか。わたくしは、必ずしも「誤解」とは考えない。「盲目法師」が、外ならぬ「平家の哀傷の物語」を「かたる」とき、その曲調に「哀傷」の気配が全く漂わないものなのかどうか、この点、改めて言うまでもないことであろう。

くだいようだが、

雑部はただ物がたりにてこそ待るめれ。哀傷の所は、盲目法師がかたる平家の物語にてぞある。

という非難は、確かに巻第十七雑歌四の哀傷歌群を「平家の物語」に準えたものに過ぎないであろう。しかし引き合いに出示された「平家の物語」は、実は「平家の哀傷の物語」のことであった。のみならず『事書』作者は、「平家の物語」に「盲目法師がかたる」という文言をわざわざ被せてもいる。こうした表現を付加したのは、当代の「盲目法師」の「かた」りに『事書』作者が惹かれてのことであり、それはつまり「平家の哀傷の物語」を語るに相應しい曲調であることを認知していたが故のことであると推断する。それ故、この『事書』の記述は、当節の「平家語り」の有り様を伝えるものとして、なおじゅうぶんな史料価値があると判定するものである。

ここで、「中世以来の古い伝統を持つ平曲を、真面目に受けついだもの」であり「中世以来の平曲家その芸能についての考え方を伝えているもの」とされている江戸時代初期の平曲書『西海余滴集』（富倉徳次郎校訂『西海余滴集

井、追増平語偶談』解説、古典文庫、一九五六年八月）の次のような文章を挙げておくのもむだではあるまい。

平家を語るに七の品有。一には神祇、二には祝言、三には恋慕、四には修羅、五には義理、六には哀傷、七には釈教等也。

こうした解釈の存在したことを知ることは、中世の「平家語り」の実態を想定するとき、すこぶる示唆に富むはずである。

2 鎌倉の「明石谷」

鎌倉に「明石谷」という地名がある。奥富敬之氏編集の『鎌倉史跡事典』（新人物往来社、一九九七年三月）の「明石谷」の項に、

播磨国明石海岸に由来した地名らしいが、地形は似ていない。

と説明されているのだが、近時、たとえば山下宏明氏などは、琵琶法師明石覚一との関係を説く。すなわち、「平家物語」の成り立ち」（新日本古典文学大系『平家物語』岩波書店、一九九一年六月）四一八頁の中で、『吾妻鏡』仁治元年（一二四〇）二月二日条に鎌倉の「辻々」での「盲法師」や「辻相撲」などの興行を禁止する布告のあること、鴨長明『発心集』第八の五「盲者、関東下向の事」に作者長明が小夜の中山の麓で「小法師」一人を伴って関東に下向する「六十ばかりなる琵琶法師」に遭遇した記事のあること、現在の鎌倉に「びわ橋」「びわ田」「びわ小路」などの琵琶法師ゆかりの地名があること、当道座の伝承に一方流の創始者了義坊如一を彼の地に居住したことをもって坂東殿と呼び、明石検校覚一の在方名「明石」も、鎌倉の朝比奈切通しに抜ける明石が谷に由来し、そこに覚一の屋敷があったという「口碑」の存在すること、朝比奈切通しに通じる「明石が谷」は相模と武蔵の境界を成し、ここに時

宗光触寺があるのは「まさに異界への通路」であり、冥界の消息に通ずる琵琶法師居住の場として格好の土地柄であることなどを述べて傍証とし、同様の指摘を「芸能史のなかの当道座と盲僧」（『平家物語 批評と文化史』汲古書院、一九九八年二月）でも行っている。

梶原正昭氏も同じような見解を示している（『平家物語』受容の様態——室町・戦国時代の琵琶法師とその芸能活動——『軍記文学の位相』汲古書院、一九九八年三月）。すなわち明石覚一の屋敷跡を伝える「明石が谷」なる地名は「かつてこの地に琵琶法師たちが多く住み活躍していたことを示唆」するとし、その傍証の一つとして鶴岡八幡宮近くの「志一稲荷」は「志一という盲目芸能者と関係がある」とした柳田国男の指摘（『孤猿隨筆』『定本 柳田国男集』第十二巻、筑摩書房、一九七〇年三月）を挙げる。

ここでは、果たして明石検校覚一の在方名「明石」が鎌倉の「明石谷」に由来するものなのか、「明石谷」が覚一の遺跡なのか、この辺りの問題をわたくしなりに解きほぐしてみたい。

ここに「明石谷」の地名を考証した論文がある。三浦勝男氏の「鎌倉地名考（二）——明石谷について——」（『鎌倉』第45号、一九八四年三月）である。三浦氏は、まず『新編鎌倉志』巻二の「一心院旧跡」の説明を紹介し、併せてこの地に「明石の一心院」という寺院のあったこと、また『吾妻鏡』建暦二年（一二二二）四月一八日、同一〇月一日条を掲げて、この地が「古くから鎌倉の代表的な勝景地」であったこと、さらに「明石」、「明石谷」の名が記されている文献史料、たとえば『鶴岡八幡宮社務職次第』元弘三年（一二三三）九月四日条、『鶴岡八幡宮寺供僧次第』建武二年（一二三三）十一月二八日条、『鶴岡社務記録』文和二年（一二三三）五月二二日条、八月一〇日条、天正三年（一五七五）成立の和歌集『桂林集』（『群書類従巻第二六〇』）、慶長五年（一六〇〇）正月吉日の『建長寺領水帳』（『鎌倉市史料編』三）などに言及する。

さて三浦勝男氏も指摘しているところだが、この「明石谷」にかかわって『新編相模国風土記稿』巻之九十三 村

里部 鎌倉郡之卷二十五〔『新編相模国風土記稿』第五卷、雄山閣、一九七〇年十一月〕中に次のような興味深い記事がある。

此谷の中程に明石檢校塔と云へるあり、由来伝はらず。

これにより、『新編相模国風土記稿』成立の天保十二年（一八四二）当時、明石谷に「明石檢校塔」があるとの伝承があつたらしい形跡がわかる。

しかしこれはまことに奇妙な伝承であつて、これよりおよそ一八〇年前の貞享元年（一六八四）に完成し、翌年開版された『新編鎌倉志』卷之二の（『新編相模国風土記稿』第六卷、雄山閣、一九七〇年十一月）「一心院舊跡」の項には、

一心院舊跡は、光触寺の南方に、柏原山と云あり。其下にあり。其所の名を明石と云ふ。故に明石の一心院と云傳ふ。寺の跡とも、又堂庭とも指云所あり。巖窟の内に木像の朽たる有。一心院の舊跡地と云傳ふ。

とあるだけで、「由来」定かならぬ「明石檢校塔」については何一つ触れるところがない。

ことは文政十二年（一八二九）開版の『鎌倉攬勝考』卷之七（前掲『新編相模国風土記稿』第六卷）も同じで、「一心院廢跡」において、

光触寺の南に、柏原山といふの下に、小名を明石といふ所あり。寺の跡と見へ、又岩窟のうちに、石佛の折たるもあり。

と記すのみ。

以上の名勝誌に照らして言うならば、まず貞享年中（一六八四―一六八八）から文政年中（一八一八―一八三〇）にかけて「明石谷」に「一心院」なる寺院の「舊跡」とそれにちなむ伝承が保持され続けた（『新編鎌倉志』『鎌倉攬勝考』）後、天保十二年（一八四二）頃に至り、その地に残る石塔に「明石檢校」の名が俄に付会された（『新編相模国風土記』）

稿」ということになる。つまり「明石」「明石谷」と「明石校」の結び付きはさほどに古い伝承ではなかったのである。さすれば、『新編相模風土記稿』が「明石谷」の「中程に」「明石校塔」なるものがあると云いながら、その「由来伝はらず」と記したのは、この「伝承」が後世の付会に過ぎぬことを暗に示唆したものと解することもできよう。おそらくはそこに、平曲、或いは当道伝承に通じた者の積極的な関与があったにちがいない。こういうのを「後世のさかしら」と言うのである。まことに人騒がせな「伝承」である。

さてこうした、言わば捏造された「伝承」が生まれたのも、「明石」「明石谷」という地名が琵琶法師の「明石」覚一に通ずることに起因するのだろうが、実はそれとは別な理由もあつたのかもしれない。

湯山学氏の「山内本郷の証菩提寺と一心院——鎌倉明石谷の別当坊をめぐって——」（『鎌倉』第43号、一九八三年六月）によれば、かつて明石谷に存在した一心院は、鎌倉時代、山内本郷の証菩提寺の別当坊で「明石本坊」と呼ばれたこと、その別当職は鎌倉中期以降、鶴岡八幡宮供僧が兼帯し、天台宗寺門派の僧侶によつて占められたという。そこに挙げられた史料は、正長〜永享年間（二四二八〜一四四二）成立と目される（『日本史広辞典』山川出版社、一九七七年九月）『鶴岡八幡宮寺社務職次第』（群書類従第三輯、経済雑誌社、一八九三年七月）だが、その第一八代社務職 覚助の項に、次のような注目すべき記述があつた。

元弘三三正慶二。九月四日。補当社檢校職。无御下向。社務代覚伊僧正。同十二月十一日下着。一心院住明石本坊。

同じ記事は、康正元年（一四五五）成立とされる（前掲『日本史広辞典』）『鶴岡八幡宮寺供僧次第』（統群書類従第四輯下、統群書類従完成会、一九二七年十一月）にも、

寺
政源 式部阿闍梨

建武二年十一月廿八社務代明石覚伊僧正被補也。

と見える。

わたくしは、この証菩提寺別当にして鶴岡八幡宮別当の社務代となつた「覚伊」僧正が一心院の「明石」本坊に住したということが、後世、明石「覚一」の「明石谷」居住の捏造「伝承」の苗床になつたのではないかと想定する次第である。「覚伊」(かくい)と「覚一」(かくいち)の発音は酷似し、しかも「覚伊」居住の地が「明石」本坊であつたのだから、ここに琵琶法師「明石覚一」との因縁が説かれるようになったとしても少しも不思議ではない。ただし先にも見たように、貞享二年開版の『新編鎌倉志』や、文政十二年の『鎌倉攬勝考』には、未だ「明石谷」には「明石検校」伝説は記されていないから、当然その付会はそれ以後ということになる。それはまた、学識のない人ではさう簡単に捏造できる質のものではなく、したがつて少なくとも「鶴岡八幡宮寺社務職次第」などを見ることが出来る鶴岡八幡宮関係者にして、平曲愛好家のような人物の主張ということにならう。

ちなみに地名としての「明石」は『鶴岡八幡宮寺社務職次第』元弘三年(一一三三)九月四日条に、「明石谷」は『鶴岡社務記録』文和二年(一一三三)五月二日条に見える由(前掲、三浦勝男氏論文)。明石覚一の生年は未詳であるが、死亡したのは応安四年(一一三二)のこと。覚一本平家物語奥書に「既過七旬」ぎたとあるから、覚一の在世時、鎌倉に明石の地名は確かに存在してゐたのである。だが、その在方名が鎌倉の小字名の「明石」「明石谷」に由来する可能性はまずないであらう。よつて今後は、『当道要集』などの「足利家の庶流にて明石を知行する故」に「明石」と言つたとする伝承の方を重視し、そこから再考すべきであらう。

最後に、柳田国男の主張した(前掲「孤猿隨筆」)鶴岡八幡宮の西隣りにある「志一稲荷」について触れておこう。結論から言えば、それが柳田の指摘するような「盲目芸能者」と関係するかどうか、極めて不審である。すなわち『新編鎌倉志』卷之四(前掲「新編相模国風土記稿」第六卷)には、

○志一上人石塔 志一上人石塔は、鶴岡の西、町屋の後、鶯谷と云所の山の上にあり。里人云、志一は、筑紫の

人也。訟ありて鎌倉に來れり。已に訟も達しけるに、文状を本国に忘置て、如何せんと思はれし時、平生志一につかへし狐ありしが、一夜の中に本国に往き、明曉、彼文状をくわへて歸り、志一に奉り、其まゝ息絶て死にけり。志一訟かなひしかば、則彼狐を稻荷の神と祭り祠を立つ。坂上の小祠是也。志一は、管領源基氏の代に、上杉家、崇敬により、鎌倉に下られけるとなん。【太平記】に、志一上人鎌倉より上て、佐々木佐渡判官入道道營の許へおはしたり。細川相模守清氏にたのまれ、將軍を呪詛しけるとあり。

と記載されているだけである。柳田は、「志一」について「察するところ盲法師であつたらう」と推断しているが、その根拠は示さない。「志一」は「狐」を使う呪術者であつたようだが、「盲法師」であつた気配はない。「志一」「盲目芸能者」とするのは、「一」を通字とした一方系琵琶法師の名前に引かれた柳田の勇み足である。

3 芳一の「耳」

ささやかなことながら、以前から氣になつていたことがある。それは、赤間関の琵琶法師芳一はなぜ両の耳を奪われたのか、ということである。

『臥遊奇談』卷之二 びわのひまきよくなかしむ ゆうれい 琵琶秘曲泣幽靈 (平川祐弘編『怪談・奇談』講談社学術文庫、一九九〇年六月) によれば、このまま芳一を見捨てると命が危ないと判じた阿弥陀寺の和尚は、「自筆をとり、又衆僧にも命じ、芳一が身に明所なく般若心経」を書き付けたのだが、「只両耳のミおとし」たがために、ついに平家の「幽魂」に奪われたという。すなわちいつものように芳一を迎えにきた「幽魂」が、

今夜いかなれば其人なし。只両耳のミおとしけるぞ知覚かたし。此耳を証見に上へ訴へ申べし。
と「両の耳朵に諸手をかけ、何気なく引ちぎり、殿を下つて出去」つたというのである。

しかしよくよく考えれば、この話は些か奇妙だと言わざるを得ない。芳一にとつて、盲いた「眼」の代わりに外界を探る有力な器官は耳しかない。されば、まずもって大事な耳に般若心経を貼るのが筋と言うものであろう。もっとも「割落され」たのは「耳郭」(ミ、のぐるり)で、内耳は失われたわけではないから、医学的に見れば聴覚上の実害はなかつたらしい。現に、『臥遊奇談』は「あやふき命を拾ひける」芳一の琵琶は、その後も「尚々妙をきハめ」という。その技量は、両耳を失っても損なわれることはなかつたのである。

しかしそれにしても、なぜ阿弥陀寺の和尚は芳一の両耳に般若心経を貼ることを忘れたのであろうか。私見によれば、実は貼り忘れたのではなく、まず「両耳」を奪われたという話があつて、それを合理化するために貼り忘れたという趣向が生じたのではないか、ということになる。芳一の「両耳」は平家の「幽魂」に奪われる必然性があつただ。なぜ「幽魂」が「両耳」を狙つたのか。それを明らかにするには、外ならぬ平家「幽魂」の登場する『平家物語』を語る琵琶法師の耳がどのように認識されていたかを解かねばなるまい。唐突ではあるが、ここで話題を聖徳太子に移したい。

周知のように、聖徳太子は三つの名前をもつていた。その一つは「うまやど 廐戸の豊聡耳とよとみみ」である。『日本靈異記』の「聖徳の皇太子の異しき表を示しし縁 第四」によれば、「廐戸」の名の由来は「廐戸に向ひて産」れたが故だとし、「豊聡耳」のそれは、「天年生まれながらに知りたまひ、十人の一時に訟へ白す状を、一言も漏らさずして能く聞き別きたまへ」る故だとしている。

この名前の由来について多田一臣氏は『日本靈異記 上』(筑摩書房、一九九七年十一月)六四頁―六五頁の補説八聖徳太子の名Vの中で、「廐戸の豊聡耳」はその「聡明さが耳にあらわれるところに由来する名だ」として、以下、次のように述べる。

その根底には古代の巫者が異界の声を聞く能力にすぐれており、耳はそうした声の依り憑く呪器であるとする考

えがある。記紀や風土記には「耳」字を名にもつ者が少なくないが、彼らは多くの場合巫者でもある。「麿戸」の名も本来は馬が神の声を聞き分ける動物であることからつけられたのだろう。さまざまな太子伝説の中で太子の予知能力が強調されるが、それは太子が異界の声を聞き取ることでできる耳をもつ巫者であったことを示している。

聖徳太子の「豊聡耳」という名が、「耳」を「呪器」として「異界の声を聞く能力にすぐれ」た「古代の巫者」に由来し、太子は「巫者」そのものであったとの指摘は、いまここで琵琶法師芳一が何故「両耳」を奪われなければならなかった理由を明らかにしようとするとき、示唆に富むはずである。

琵琶法師の職掌の一つは、「平治保元平家之物語」を「何レモ皆暗ンシテ滞リナ」（『普通唱導集』）く語るところにあった。それにしても、琵琶法師はなぜ幽明境を異にする人々の物語をそれからそれへと、まさに「滞リナ」く紡ぎ出すことができたのか。改めて言うまでもなくそれは、彼の徒輩が「物語」を「皆暗ンシテ」いたが故である。洋の東西を問わず、彼ら盲人は人並み外れた暗記力の持ち主であった（荒木博之氏「盲目の吟遊詩人たち——ホメロスから盲僧まで——」『月刊百科』No.二四、平凡社、一九八〇年七月）。その流麗な語り口に、人々は、常人とは異なる彼らに、すば抜けた記憶力を思い知ったであろう。と同時に、彼らが「あの世の人々の物語」、すなわち「異界の物語」を口にするのできるの、たとえば聖徳太子のように彼らが等しく「異界の声を聞く能力にすぐれて」いたがためだと認識していたものと思われる。琵琶法師の耳は「古代の巫者」のそれと同じだからこそ、時空を超えていまも彼ら死者の声を「聞き分ける」ことができたのだと。それ故、夥しい数の死者の声に満ち溢れている「平家」の物語を語るることができるのだと。

話を再び芳一に戻せば、彼が安徳御陵の前で平家を語ったのは、深夜、密に阿弥陀寺に入り込んだ何者とも知れぬ「芳一」と呼ぶ「声」に応じてのことであった。後日、捜索の人々に安徳帝御陵の前で平家語りをしてるところを

見つかり、「狐狸の為に化かされし物成るべしと罵」られる羽目になるが、これこそまさに芳一が常人の聞こえぬことばを「聞き分ける」能力をもっていたことの証明であった。

芳一が、平家の「幽魂」、すなわち幽明境を異にする者のことばに誘われて「平家」の物語を語り、それがために命を失う寸前までに至ったという話が生まれるには、かつて琵琶法師が常人と異なる「耳」をもっていたこと、すなわち多田一臣氏のことばを借りて言うなら、「異界の声を聞き取ることのできる耳」をもっていると信じられたことの痕跡でなくて何であらうか。言わば琵琶法師は、その「耳」を通して「異界」の「幽魂」と通信できるが故に、その物語を語ることができると、人々に信じられてきたのではないか。

芳一がその「両耳」を奪われたのは阿弥陀寺の和尚が般若心経を書き忘れたせいだというわけで、趣向の上ではうまく帳尻が合わされている。だが同時にそれは、この寓話が、琵琶法師芳一が何故「幽魂」に耳を奪われなければならなかったか、その真の理由が、もはや何人にも理解できなくなった時代の所産であることをそれとなく暗示しているのではなからうか。

盲人にとつての「耳」は、晴眼者の「目」である。盲人は外界の変化を知るに多く「耳」による。それ故、微かな物音に対してもその耳は敏感となる。目も見え、耳も聞こえる者に比べて、その聴力は遙に優る。そこから、盲人の「耳」が「幽魂」のことばを「聞き分ける」力をもつと信じられるに至るまでは、ほんの二跨ぎのことであつたであろう。いずれにしても、平家の「幽魂」が芳一の「両耳」を奪つたのは、その鋭敏過ぎる「両耳」で「異界のことを聞き分ける」ことができないようにすること、すなわち「平家」の物語を語れなくするためであつたと思ふ外はない。

両耳を奪われてなお、芳一の「琵琶ハ妙をきハめ」続けた。しかし先述のようにこれは、既に耳を奪われることの何たるかがすっかりわからなくなつた時代の貧困な想像力の所産でしかない。見えにくくなつてはいるものの、この寓話の根源に潜んでいるものは、琵琶法師の鋭敏な耳には「異界のことを聞き分ける」、死者のことばを「聞き分け

「機能があるとする観念であつたにちがいない。芳一の「両耳」は平家「幽魂」の手に歸しはしたが、その根源的な機能までにはついに奪われることはなかつた、と言えようか。